

暮らししにぬくもり県産材
『すすめよう地産地消』

家具・木工など

家づくりだけではなく、家具や建具、木工品、造園、燃料など、
青森県産材の活用は様々な分野に及んでいます。
創意と工夫をこらし、卓越した技術を駆使して、
幅広い展開が図られています。

『地産地消』の想いを胸に、
日々、努力と研鑽を重ねている方々を
ご紹介します。



株式会社 今井産業 モクテック工業

平川市

東京ビックサイトで開催される『産業交流展2012』の招待状が、(株)今井産業(平川市)から届いた。産業交流展とは、首都圏中心の中小企業による国内最大級のトレードショー(産業見本市)で、15回目となる今回の展示会に青森県からは



1社、今井産業が、自社で開発した新素材の木製段ボール『e・Wood』(註)を出展するのだ。廃材や間伐材など地域資源を活用して開発した100%リサイクル可能な木製エコ素材――。交流展初日の11月20日に新幹線で取材に向かった。

首都圏を中心とする中小企業980社のブースが縦横に連なる会場の一角、地方からの出展ブースの並びに「今井産業」の社名を見つけた。今井産業社長は接客中であつた。木を使った段ボールは出来ないものだろうか――。今井社



産業交流展で来場者に説明する今井社長(右)

長がそう考え出したきっかけは10年ほど前、上京した折りに段ボールで作った収納ケースを見たことだ。紙の箱、に驚いたという。紙なのに潰れないのは、段ボールの“波形”に秘訣がある。その波形を、木で作れないものか。試作に取りかかったのが3年前。薄板を煮沸して作る

曲げわっぱをヒントに試行錯誤したが、波形になかなか辿り着けない。金型で実績のある鉄工所(秋田県)の社長に相談を持ちかけた。毎日のようにメールでやりとりし、秋田から社長が訪ねてきたり、今井社長が秋田へ出かけたたりが続き、ついに1号となる製造機械が完成し

木の段ボール『e・Wood』を開発 地域資源の廃材活用した新素材

た。厚さ0・5ミリの薄板が高
さ6ミリの波形になつて機械か
ら押し出されてきたときには
嬉しくて涙が出た、という今井
社長の話を思い出す。

ブースに展示されている、
『e・Wood』で試作した「組
み立て棚」や「組み立てテーブ
ル」、リングの木を使った照明器
具にカメラを向けて撮影する。
青森県で開発された木の段
ボールを使って今後どんな新
商品が全国で誕生することに



『e-Wood』で製作した組み立て棚

なるのだろう。接客の合間に、
今井社長にうかがった。

「蜂の巣を作つたらどうか、とい
う話がありました。養蜂をやっ
ている方なんだそうです。さっ
きその方が立ち寄って、今まで
は強化段ボールで蜂の巣を作っ
ていたんだけど、強化といつて
も紙は紙だから雨に弱いのが
ネックで、何か良い素材はない
かと探していたんだそうです。
波形をしたこの『e・Wood』
は木だからピツタリなわけです

よ」と笑う。

長野県から訪れたという女
性デザイナーが『e・Wood』の
見本を手にして、「これってワク
ワクする形をしていますよね。
なんか革命につながるようなワ
クワク感。大きな可能性を秘め
ているような気がします」と目
を輝かせた。新商品の販売促進
の企画を手掛けているというデ
ザイナーの反応に、今井社長は
満足げにうなずいていた。

註：『e-Wood』Genは、ecology(環境
にやさしく)、essence(木の素材をそ
のままに)、economy(も値打ち価格
で)の意味。



大きな可能性を秘めている『e-Wood』



自然のぬくもり暮らしの中に

株式会社 今井産業

- 本 社 ● 平川市新館藤山16-1
TEL.0172-44-2145 FAX.0172-44-2568
<http://www.nijironomori.net>
- 弘前常設展示場 ● 弘前市泉野3丁目16-4
TEL.0172-55-0440 FAX.0172-55-0441
E-mail: llp-genki@clear.ocn.ne.jp
- 青森常設展示場 ● 青森市富田4丁目12-22
TEL.017-752-0981



Wood rack ウッドラック

青森市



左から相馬代表(ウッドラック)、古村さん(同)、石村さん(同)、小野沢さん、伊藤さん、遠藤さん

「あさこはうす」に支援の新ストーブを……。そう呼びかけるメッセージが、青森市の薪ストーブ販売店「ウッドラック」の相馬代表に届いた。発信したのは、函館市で「ファイヤピット」を営む大石さん。日頃か

ら『フェイスブック』で情報交換し合っている同業の仲間である。

青森県大間町で建設が進む大間原発の建設地の中に、ログハウスの「あさこはうす」は建っている。先祖から伝わるこの土

地を手放してはいけない」と、故熊谷あさこさんが住むつもりで建てたもので、現在は、函館在住の娘の小笠原厚子さんと、あさこさんの意思を継ぐ人々によつて守られている。そこに、冬でも滞在できるように薪ストーブを付けてあげよう、というのが大石さんからの呼びかけだ。

このメッセージは、『フェイスブック』でつながる長野市の「マキメン」(薪ストーブメンテナンス)こと小野沢武生さんや、山

形の遠藤伸作さん(ウッドディ)、大船渡の伊藤憲治さん(薪屋)にも届いていた。「皆でやろうよ、つてすぐに意見がまとまったのは、陸前高田での薪割りボランティアをきっかけに生まれた仲間意識ですね」と相馬代表は話す。1年前の東日本大震災で流された高田松原の7万本の赤松を薪にして販売し、収益金を復興支援に充てようと全国から薪ストーブショップ関連の有志たちが参集したのだっ



ログハウスに煙突を取り付ける相馬代表たち

た。盆の13日。大雨の中を「あさこはうす」に到着したワゴン車から、マキメンの小野沢さんが降り立った。長野から1000キロもの道程を走破してウッドラックに合流し、そこから大間に向かったのだ。先に到着していた遠藤さん、伊藤さんと挨拶しているうちにもずぶ濡れになるほどのどしゃ降り。さっそくミーティングを開き、役割分担を確認し合つて、作業にかかった。

ログハウスの内壁を電動丸ノ

「あさこはうす」に仲間たち結集 薪ストーブで“供養の火”燃える

コで四角くくり抜く。そこに煙突を通すメガネ石をはめ込む。外壁に煙突を固定するための金具を取り付けたのは、紅一点の石村真弓さん(ウッドラック)だ。相馬代表と遠藤さんが切

妻屋根の上まで煙突を立ち上げる。その間に、内部で小野沢さんがストーブを設置した。長野の別荘で役目を終えたデンマーク製の中古ストーブを小野沢さんが修理したものだ。煙

突も、仲間たちが提供してくれた中古部材を組み立てたもの。すでに取り付けられてあった床の炉台と、背後の炉壁は、名古屋や三重、陸前高田、函館から駆け付けた先発隊が作業した。



ストーブに火が点され、陸前高田の赤松が“供養の火”となって燃え上がった

昼過ぎから半日がかりで設置が完了。合わせたように雨があがつて夕焼けがにじんだ。ログハウス内にロウソクを灯し、ひと仕事終えた面々が薪ストーブを取り囲んで座る。いよいよ火入れである。焚き付けが燃え出し、薪からやがて炎が上がった。その薪は、皆で協力して割った陸前高田の赤松である。先祖から受け継いだ土地を守りたい一念で建てたものの移住が叶わなかったログハウスで、薪は、熊谷あさこさんへの供養の火となって燃えていた。

薪ストーブと
木の雑貨

Wood rack



ウッドラック

青森市自由ヶ丘1丁目2-13

TEL.017-752-0133 FAX.017-752-0134

E-mail: info@woodrack.jp



ウッドラック
オーナーズクラブマーク



有限会社 刈田工業

八戸市



樹齢200年のサクラで作った味わいあるテーブル

刈田恭孝社長 青森ならヒバ、秋田ならスギ、というように、それぞれ地域を代表する「木」がありますよね。横浜市内では、「木」といえばケヤキなんだそうですね。そうと知ったのは、今年

(2012年)1月に横浜の高島屋(横浜タカシマヤ)で開かれた「青森物産展」で接客したときでした。横浜の人たちにとって「木」はケヤキで、ケヤキじゃないと木ではないというくらいに定着しているようなのです。その物産展に、青森のスギで作ったテーブルとかイスとかを出品したのですが、「なんでケヤキで作らないの?」って、まじめに聞かれましたよ。ケヤキの木が「家具」となって、横浜の人たちの暮らしに根づいているということなのですね。

3月にも岡山市の高島屋(岡

暮らして山に育つように 樹木が山に育つように 暮らして根づく「家具」

山タカシマヤ)で物産展が開かれたんですが、そこでも横浜と同じことを感じました。岡山では、「木」はイチイなんだそうですね。さいわいイチイでこしらえた2人掛けのベンチや、小物の名刺入れを出品して、それらはすぐに売れましたけどね。

その地域に適した樹木が山に育つと同じに、家具も生活にとけ込んで人々の心に育っているものなんだ——と、物産展を通じて認識を新たにしました。

2階にショールーム開設

手作り家具の良さは、実際に見て、触れてこそ伝わるものです。無垢材のなめらかな手触りや座り心地をいつでも体感できる場として、当社の工場・事

務所の2階にショールームを開設しました。約130平方メートルの広いワンルームになっていて、スギやサクラなどを使ったテーブル、イスなどを展示しております。

初め、ショールームは、一昨年(2010年)に、1階のコーナを利用して設けました。八戸ポータルミュージアム「はっち」などで開いた展示販売会で、お客様から、もつといういろいろ家具を見てみたいとの要望を



手作りの家具の良さを伝えるために2階に開設されたショールーム



ほのかな明かりを灯すスギのあんどん

頂戴するようになったのがきっかけです。昨年、水回りのリフォームの相談に来られたご夫婦が、ショールームに展示してあったテーブルとイスをご覧になって、「見たらほしくなった」と購入してくださいました。もともと多くの方々に見ていただくとうと、2階のスペースを活用することにしました。

樹齢約200年のサクラで作ったテーブルが、ショールームに展示してあります。おがみ神社（八戸市）の境内に立っていたサクラの老樹を伐ることになって、それを宮司さんから譲り受けたのです。8月に青森市の「アスパム」で開かれる恒例の「あおもり木工フェア」に出品します。スギで製作したイスや、イチイのあんどんなども出します。木工フェアの次は11月にはつちで開かれる「県産材フェア」（三八・上北流域活性化センター主催）にも出品します。展示会でも、ショールームでも、



座り心地がよさそうなスギのイス



塗装をかけたスギのイスから豪華な雰囲気は漂う

実際に見て、触れて、無垢材を使った手作り家具の深い味わいを体感してみてください。

有限会社 荻田工業

本社 ● 八戸市柏崎5丁目5-8
工場・事務所 ● 八戸市大字妙字花生8-128
TEL.0178-25-5113 FAX.0178-25-5115



株式会社 グリーンフォレスト

青森市



庭をライトアップすると日中とは違った外観が現われる

平澤英輔社長 「自然」は遠くの山ばかりにあるのではなく、ご自宅のすぐ外にも自然があります。「庭」です。庭は、最も身近な自然といえます。そう思っただけで庭に目を向けてみると、これまでとは趣きが違ってくるのではないで

しょうか。

庭の木や草花の名前を知ると、庭への親しみが増します。名前を知らなければ「庭」全体として目に映っていますが、名前を知ると、その植物が庭から浮き上がって目に飛び込んでくる、そんな感じがするはずですよ。名前を知るには、知識として詰め込むのではなく、庭いじりを楽しみながら、ご自身で枝を切ったり、植えたりしているうちに自然と覚えるのが一番です。木や花と接しながら自然と染み込むように覚えた名前は忘れません。

「庭」と親しんでみませんか 咲く花や生る実で季節を知る



「自分で枝を切ったり植えたりして庭いじりを楽しんでいるうちに植物の名は自然に覚えます」と話す平澤社長(左)

先日、講師を務めたある住宅関連のセミナーで、参加者にこんな質問をしました。

——青森市内にはどの方向から吹き付ける風が一番多いでしょうか？

「北西」「西」と回答が寄せられました。正解は南西です。そ

こで、窓が南西に向けて付いていれば、直接風が吹き込まないようその手前に庭木を植え、逆に、その方角に向いていなければ、木に当たった風が窓から間接的に入り込む場所に植えます。窓から入り込むのは風ばかりではありません。夏には直



グリーンフォレストが手がけた魅力ある庭づくり(上下)

射日光を葉が遮ってくれ、冬には葉の散った枝越しに暖かな陽が室内へ射し込みます。このように庭木には、風と光のコントロール機能があるので。

最近、シンボルツリーが人気を集めています。若い世代は共働きが多いから、庭に手をかけ

る時間はあまりありませんし、家が建つ敷地も昔に比べればだんだん狭くなってきているので、庭のシンボルとしての1本の主木、つまりシンボルツリーです、それを植えて庭と親しむケースが増えてきています。

シンボルツリーを植えたいと

希望されるお客様には、花が咲く木がいいか、実が生るのがいいか、それとも姿かたちがいいのか、を聞くことにしています。

若い方は、姿かたちのいいもので、メンテナンスのしやすいものを希望されます。年代を問わず人気が高いのは、ジュンペリイです。桜の後に白い花を付け、ジュンペリイの名前にちなむ6月に実が生ります。花が咲いて春を知り、実が生って夏を知る、というわけです。

ヤマボウシも人気があります。上に向けて花が咲くので、2階の窓から花を楽しめます。それぞれの木の特徴に応じて植える位置を決めています。

日中に目にする庭と、暗くなつてからライトアップして眺める庭は、まったく風情が違って見えます。帰宅する家族を迎える雰囲気の出るところがライトアップの魅力です。庭に明かりが灯ることで街並みも明るくなります。ぜひ試してみてください。



garden design/plants/gardening zakka

青森の庭づくり・ガーデニングと雑貨のお店

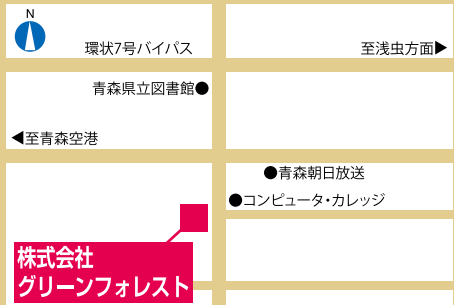
株式会社 **グリーンフォレスト**

青森市荒川柴田159-2

TEL.017-718-2624 FAX.017-718-2625

URL : <http://www.greenforest.jp>

E-mail : info@greenforest.jp



津軽ペレット協同組合

五所川原市



松野武司代表理事 本県の資源といえ、森林資源です。県土の約7割を占める森林に潤沢に育っている樹木に恵まれ、いながら、現実には、間伐された樹木が利用されぬまま山に放置されているのです。当組合で

は、この「林地残材」を活用して地域経済の活性化につなげようと平成20年（2008年）に木質ペレットの製造を始めたわけです。

県内で1年間に間伐される木の量は20万立方メートルあります。そのうち山から運び出されるのは4万トンだけで、あとの16万トンは山の中に捨てられているのです。木の価格が低迷しているからお金をかけて運び出しても割が合わない、というのが実情なのです。16万トンの間伐材があれば、ペレットを5万8000トン



間伐材を機械で破砕してオガ粉にする

も製造できます。当組合で販売しているペレットは1袋10キロ入りで450円ですから、5万8000トンがそのままペレットに変われば26億円のお金を生み出すことになるのです。それほど大きな経済効果が生まれ、生み出されたお金が全部県内に落とされることが重要なのです。ストーブで灯油を焚い

ている限りは、お金は海外へ流れていってしまい、地元にお金は落ちません。海外から買わなくても、間伐材は近くの山にたくさんあるのです。当組合の製造量は年間に2000トンですから、その間伐材を利用できるようなになれば、ペレット工場が県内にもうあと5つも6つも出来るといふこととなります。

間伐材燃料に発電所建設へ 大きな経済効果、雇用発生



暖房や給湯に限らず木質バイオマスは発電へと可能性を高めている

それらの工場で働く人の雇用も発生するのです。

そこで、山から間伐材を運び出すための「しくみづくり」に取り組むことにしました。それが、すでに地元紙でも報じられた間伐材を燃料とする発電所

の建設です。2012年の暮れに、西北五地域の民間事業者が

「木質バイオマス発電所を立ち上げる会」(発起人は木質ペレット製造業者らの代表7人)を設立し、事業説明会を開きました。事業を進める母体とし

て12年度内に新会社の「津軽エネルギー(株)」を興す計画で、15年度までに事業化を目指すこととしています。発電規模は1時間当たり3千キロワット、年間約2万メガワットを想定し、電力会社に売電します。見込んでいる木材使用量は年間4万トン。間伐材を1か所に集める「木材ステーション」を設置し、そこで製材用や燃料用、発電用に振り分けます。実現までの道のりはあるにしても、誰かがやらなければ、貴重な資源がゴミで終わってしまいます。

十和田市では、市内に新しく建設する観光物産館にペレットボイラーを導入することを決めたといえます。物産館に続いて建設する博物館にも、冷暖房用のペレットストーブも導入することになっているようです。

こうした自治体の積極的な取り組みが広がれば、自ずと需要が伸びて、間伐材が地域資源として経済活性化をもたらせるようになるのです。

<http://www.tpele.com>

木質ペレットもストーブも販売中

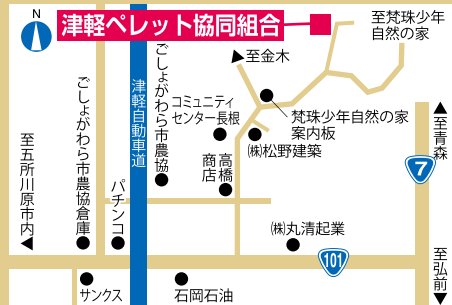
津軽ペレット協同組合

津軽ペレット協同組合

〒037-0611 青森県五所川原市大字神山字殊ノ峰95-9

TEL.0173-29-3313 FAX.0173-29-2435

E-mail : info@tpele.com



株式会社

ヒバックス青森

中泊町

北津軽郡中泊町中里——といえ、津軽半島の中程、かつての中里町と小泊村が合併して誕生した町だとは青森県民なら知っているが、遠く離れた関西・九州方面などの人にしてみれば、地図を広げて探し出すまでには時間がかかることだろう。



ヒバの浴槽が空間に豪華さを漂わせる

ところが、青森ヒバ製品がところどころ、中泊町中里は、ピンポイントで全国とつながっている。中泊町中里にある「㈱ヒバックス青森」がその窓口だ。青森ヒバ製品をホームページで見た北海道から沖縄県までの全国の人たちから問い合わせの電話やメールがくるのである。

津軽半島を北上する国道339号から、中泊町の旧中里町の街なかへ折れると、役場近くの道沿いにヒバックス青森はある。取材に訪れた日(2012年11月)、工場では職人たちが鉋がけをしていた。鉋で表面を紙のように薄く削られている板は、青森ヒバである。美しい木肌と香りの良いその板で浴槽を製作するのだ。「6件も注



断熱性、耐久性に優れ美しさも備えた和風木製サッシ

文が重なって、製作に追われているんです」と田中健一社長。他にも、長野県、兵庫県などの工務店から受けた注文書が社長室のデスクに積み重ねられて、その製作にも取り掛からなければならぬが、「今は急ぎの浴槽を作るのが先です」と笑う。

取材の途中、電話が鳴った。田中社長が出た。受け答えからして製品への引き合いのようだった。ホームページを見てかかってきたのだろう。受話器を置いて田中社長が、今の電話は木

製の玄関引き戸を検討しているという京都の工務店からだという。さっそく図面がファクスで送られてきた。京都の新築の家にヒバックス青森の製品が設置されることになりそうである。

昭和44年から急速に普及したアルミサッシによって建具職人は仕事を半分奪われ、その後平成になつてからは室内の建具も大手建材メーカーの既製品に奪われるようになった。そんな時代の流れとは逆行して、田中社長は青森の山々で育った

青森の宝の木「天然青森ヒバ」で製作 木製玄関ドア引き戸、窓サッシ、浴槽

自然の恵みである天然青森ヒバ材を活かし、「作品」とも言える製品を職人の技術で一つ一つ作る手仕事にこだわり続けて

きた。
田中社長がヨーロッパ、ドイツから技術を導入して木製サッシを製作してから20年、同

社のオリジナル和風木製サッシを開発してから15年になる。

「木製窓は、腐って長持ちしないとか隙間風が入るとか思われがちですが、枠と一体にした構造と気密材の併用によって、

アルミ・樹脂サッシよりも断熱性と耐久性が優れているのです。当社では1950年創業以来の建具・家具・アルミ加工・ド

イツ式木製サッシのフィードバックされた技術とノウハウを結集させて製品づくりをしているのです」。毎日のようにお客様のニーズに沿って図面を描いているうちに、大抵の注文に

えられるようになったという。「青森ヒバは宝の木ですよ」

中泊町から全国へ青森ヒバ製品を発信し続けることに、15歳からこの道46年の田中社長は生涯を捧げる。



青森ヒバの木肌が美しいオリジナル和風木製玄関引き戸



Hibaccs
Aomori

森から百年の贈り物をあなたに

株式会社 ヒバックス青森

本社 ● 北津軽郡中泊町大字中里字紅葉坂40-1

TEL.0173-57-4134 FAX.0173-57-4546

フリーダイヤル 0120-4134-98

URL : <http://hibaccs.com/>

E-mail : aomori@hibaccs.com



わにもっこ

大鰐町

散り敷く落ち葉を踏みながら山道をゆく山内将才さんが、歩を止め、振り向いた。



手のひらの形の葉っぱの、切れ込みの深い方がモミジ(左)で、浅い方がカエデ

「これ、何の木か分かりますか?」。頭上に伸び立つ木を指差して参加者に問いかける。ひよいとしゃがんで、木のそばから大きな葉っぱを拾った山内さんが、「これはホオノキの葉なんです。ホオとも呼びます。あの枝から落ちてきたんです」と指差す。見上げると、広がる枝先に同じ大きな葉が何枚か付いていた。

「木だけを見ても何の木なのかはなかなか見分けが付きません。それで、葉っぱを見るのです。葉っぱにはそれぞれ特徴があるから、一度覚えてしまえばすぐに見分けがつくようになります」。山歩きを楽しむながらそう教えるのである。

晩秋の11月初旬。この日、山

肌が紅色や黄色に染まる大鰐町の山里で「森の学校」が開かれた。夜来の雨があがらぬまま開始時刻を迎えたが、山道の散策を楽しみにしていた家族連れがそれぞれ車で「わにもっこ」に集合した。講師を務めるのが、わにもっこの山内将才さんである。

「これ、何の木か分かりますか」。また立ち止まって山内さんが、道のかたわらの木を指差した。枝先から取った葉っぱを、鼻に近づける。「あまーい、いい匂いがしますよ」と目を細めた。参加者が代わる代わる葉っぱを鼻にあてて、「あ、ほんとだ。甘い匂い」。山内さんが、「これ、カツラの葉なんです。散るときにこんないい匂いがするんですよ」。子供たちも、「あまーい、あまーい」と競うように声をあげる。

拾った落ち葉を手のひらに乗せて、「カエデとモミジの葉なんです、どっちがどっち



“森を見て木を知る”楽しさを話す山内将才さん

だか分かりますか」と山内さんが問いかける。葉を覗き込む子供たちが首をかしげている。見分けるコツはここです、と山内さんが葉を指差した。「どっちの葉っぱも手のひらの形をしています。指と指の間の切れ込みの深い方がモミジで、浅い方がカエデです」。そうと知ると、これまで似た葉っぱと見えていたカエデとモミジが明らか違いをもつて目に映る。一旦コツをのみ込んだ「実践の知識」はもう忘れない。

森を見て木を知る

いきなり足元の草むらからバサバサと音をたてて鳥が飛び立った。2羽いた。番のようだ。「ヤマドリです」と山内さんが飛び去る鳥を指さす。今度は川を覗き込んだ男の子が、「あつ、魚！」と叫んだ。皆、そばに寄る。「あ、いたいた」。清流の底で素早く動いた小さな影は、イワナらしい。

雨の日には雨なりの濡れた森の風情がある。訪れたときの森の自然の、一瞬一瞬が



それぞれにみな美しい。『森の香り、音、朝靄、闇、雪の景色など瞬間の美しさはそこではか得るこ
とが出来ない』——山内さんはそんな
思いで森と触れ合っている
という。

大鰐のこの山里で生まれ育った山内さんの子供の頃



子供のベンチ ウマとゾウ(上)、森のどうぶつ バランスつみ木(下)

の遊び場が、今回案内してくれた山だったという。
落ち葉が散り敷く森への山道が、山内さんの生業となる木工の道へとつながっている。

わにもっこ企業組合

南津軽郡大鰐町大字早瀬野字坂本72
TEL.0172-48-5526 FAX.0172-47-5091
ひばのくに迎賓館 TEL.0172-48-5876
<http://www.wanimokko.jp>



ふるさとの
木に
親しもう

